

# 第16回坊っちゃん文学賞 大賞作品

はがま  
羽釜

高野 ヌタ

「はあちゃんの付き添いで来た蚤の市で店先の商品を見ると、もなしに見ていると、店の奥から店主らしき男が声をかけてきた。」

「はいちゃん、目の付け所がいいねえ。そいつはなかなかのシロモノだよ」

頭部のさみしい店主が緩んだ口元をにたつかせるのに、俺はなんのこともとどろきを見回した。どうやら男は、目の前の古そうな釜のことを言っているらしかった。これは押し売りコースだな。危険を察知した俺は、適当な愛想笑いを顔へ貼り付けて、半歩分身体を引いた。

「まあまあはいちゃん、これはただの釜じゃあない。羽釜の中の羽釜しつやしたぜ」

店主は俺の回避姿勢を見破ったのか、「ちよつと触ってみな」と強引に俺の手首を掴んで釜へと持っていく。寒空の屋外で開かれている蚤の市だ。釜は鉄製だし大層冷えているだろうと身構えたが、手が触れた羽釜は、なぜか人肌くらいに温かかった。

「な、ぬぐいだろ」

「はあ」

「なんだ反応わりいな。すげえだろ？ ま、騙されたと思って、はい、毎度あこ」

「え……ちよつと」

店主は俺の抗議の声も聞かず勝手に羽釜を梱包すると、中士だから特別安くしておいてやるよとか言いつつながら俺から二万円札をふんだくった。そして新聞紙とビニールで梱包された羽釜を俺の両手へ押し付けて、あからさまなほくほく顔を浮かべた。勝率の悪い戦いに抗うのを諦めた俺は、軽くなった財布と両腕に重い羽釜をため息混じりに受け取って、はあちゃんがいる店の方へとほとほと戻った。近くまでくると、はあちゃんはちよつと馴染みの店で買い物を終えたところだった。

「はいちゃん、はいちゃん。見て、キュタフヤ陶器の飾り皿。綺麗でいい」

「キュタフ……なに〜」

「はあちゃんは小さな袋からカラフルな陶器を取り出しかけて、俺の抱える大荷物に目を丸くした。」

「あ、はいちゃんもなにを買ったの〜」

「まあ、うん。なんかよくわからないけど……多分、お釜……」

普通大学生が絶対に必要としないであろう押し売りされた感満載の品物に、俺はもももも口ごもった。けれどはあちゃんは少し驚いた顔をただけで、「じゃあ重いだろうし、そろそろ帰ろっか」と優しく笑っただけだった。

久しぶりに来たはあちゃんの家は、なんとも統一感のない異国のようになっていた。棚にはマトリョーシカやくるみ割り人形が並び、はいちゃんの仏壇もどこの国のものかわからない民芸品で賑やかになっている。はあちゃんはペルシヤ絨毯らしき織物の上に「ちよつと座ると、買って来たばかりのキュタフなんだかを丁寧に取り出して、棚の一角にひとつずつ飾った。はいちゃんも」と促されて釜の梱包を剥がしていく。見えてきた鉄の肌にはあちゃんは「あら」とつやのある頬を持ち上げた。

「これはなかなか素敵なお釜さんねえ。はあちゃん久しぶりに見たわ」

「ううん、でもこれ中古だよ」

値段が立派なのは間違いないが、ぼつと見た感じはそこそこ年季の入った普通の釜だ。温かみはあるかもしれないけど、特別目立ったところはない。今月の食費を奪われた俺が口を尖らせるのに、はあちゃんには「こり微笑んで羽釜の縁を撫でた。」

「はいちゃん、お米をといでくれないかい」

「米……ううん……この釜、使ってみるの〜」

二合分の米を掬いながら、はあちゃんがいたずらっぽく笑う。俺はよくわからないまま用意してもらった米をどぎ、釜に指し通りの水を注いだ。

「はいちゃん、羽釜さんはいちにお願ひね」

振り向くと、台所から「足先に戻っていたはあちゃんが縁側でお茶の用意をしながら手招きしていた。

「なに、薪でも燃やすの〜」

「まあか。羽釜さんはいちにお願ひね」

お茶を注ぎ終えたはあちゃんが、とんとんと自分の隣を優しく叩く。

俺はそのさらに隣へ座るよう促され、はあちゃん、羽釜、俺と横並びに縁側へ腰かける形になる。それから少しの間、羽釜を挟む奇妙な並びで、はあちゃんとお茶をすすった。

「はいちゃんね」

お茶を一杯飲み終えたはあちゃんがそう呟くと、隣に置いた羽釜がカタカタと揺れて、直後大きく羽を広げて飛び立った。浮き上がった羽釜は白い大きな羽を力強く羽ばたかせると、一度ぐるりと回ってから、瞬く間に遙か彼方へと飛び去ってしまった。

「うん、やっぱり立派な羽釜さんだよ」

驚いて腰を抜かしている俺の横で、はあちゃんは頷きながら杯目のお茶をすすった。

「上等な羽釜はね、羽も上等だから、あめして自分で飛んでいくのよ。大丈夫、ちあんと帰って来るから」

はあちゃんは俺の頭をぽんぽんと撫でてから俺の湯のみにおかわりを注ぐと、よっこいしょと腰を上げて台所へ入っていった。俺は狐につままれたみたいな気持ちで、お茶を飲みながら羽釜が飛び去った空の辺りを眺めて待った。しばらくすると、鰐だしの味噌のいいにおいが縁側いっぱいに漂った。

羽釜が飛び立ってから二十分くらいが経った頃、はあちゃんの言葉通り、空の向こうから羽釜が飛んで帰ってきた。羽釜は、はあちゃんが用意した派手な柄のフッシーの上までやってきて、静かにそつと羽を纏めた。

「おかしなさい羽釜さん。ちよつとよかつたわあ」

はあちゃんは羽釜に話しかけながら、両手で羽釜の蓋を取った。瞬間、俺とはあちゃんの間で、真っ白な湯気がもわりと立ち上る。奪われた視界がようやく戻ってくる、湯気の下からさの炊き込みご飯が顔を出した。

「あ、出来て行って来たのねえ。う、苦労したよ」

羽釜にちよつと手を合わせてから、はあちゃんが釜に沿ってへらへらと手を合わせていく。俺は心なしか白慢げな羽釜さんに倣って手を合わせた。

「うまい〜」

「うん、美味しいねえ。さすが羽釜さんだよ」

羽釜のご飯は信じられないほつとまかつた。俺もはあちゃんも何度もおかわりをして、釜の飯は見る見る減っていった。はあちゃんが用意してくれた味噌汁は、その美味しさを何百倍もプラスした。

ふたりでご飯をすつかり平らげると、空になった釜に一緒に手を合わせた。俺はアパートへ帰る前に、感謝の気持ちをこめて丁寧に羽釜を洗った。洗い上げた羽釜は蚤の市で見たときよりもつやが出て、触ればやっぱり温かかった。

羽釜のご飯はひとり暮らしのアパートで食べても美味しいけれど、はあちゃんと一緒に食べるのもつとつと美味しかった。海に飛べば鯛飯やあさりご飯を、山に飛べば栗ご飯をとし、パーティーは豊富だったし、もちろん白飯だけでも美味しくて、はあちゃんの味噌汁や漬け物との相性も最高だった。そのうちあべこべな異国みたいなはあちゃんの家にも慣れて、たまにお店で見つけた外国の民芸品をお土産に持っていったりもした。そして毎日のようにふたりで羽釜を空に放って、帰ってきた羽釜に手を合わせた。はあちゃんは羽釜が帰ってくるまでの間にいつもみそ汁と付け合わせを作ってくれて、俺は食べ終わったあとに羽釜を丁寧に洗った。

そんな日曜日のことだった。いつもは三十分ほど帰ってくる羽釜が、一時間経っても二時間経っても一向に姿を見せなかった。もしかしたら途中でなにかあったのだからうかつと落

ち着かない時間が何時間もすぎず、すつかり日が落ちた頃になって、ようやく羽釜は帰ってきた。

「戻った。なにかあったのかと心配しちゃったわ」

「うん。でも大丈夫よ」

いつものように羽を纏めた羽釜はちよつとぶらぶらしてはいるけれど、傷もないし元気がうだ。けれど少し、いつもとは様子の違うところがあった。

「なんだろっ、このにおい」

羽釜から、いつもとは違う匂いだ。このない香りがする。

「なにかしらねえ。羽釜さん、なにを炊いてくれたの〜」

ふたり揃って首を傾げながら、そつと蓋を開ける。途端、独特の香りに海の香りののった湯気が溢れ出し、湯気が消えると、殻つきの海老に貝、輪切りのイカやパプリカ、そして黄色いご飯が見えてきた。

「……パエリアだ」

スペイン料理の定番、パエリア。羽釜に入っていたのは、それだった。羽釜はいろいろなご飯を炊いてはくれたけど、今までどれも日本の料理だった。しかもそのパエリアには、なぜかムール貝じゃなくて蛤がのっている。俺が不思議に思っている、と「もかし……」と隣ではあちゃんが呟いた。

「羽釜さん、代わりに行ってくれたの〜」

「ううん、はい」

「海外旅行、おじいちゃんとおばあちゃんの夢だったの。でもお金もなかったし、パンフレットで机上旅行ばかりしててね。……結局、どこにも行かないうちにあの人が逝ってしまった」

ぼつりぼつりとばあちゃんが言うのに、俺は部屋を見渡した。部屋の半分ほどを占める世界の民芸品が、あちこちでカラフルに輝いている。

「スペインは最初に行こうって言っていた国で、蛤はね、あの人の好物なの」

ぼつと知っているのかしらね、と愛おしそうに羽釜を見つめるはあちゃんの目が、うつつらと滲む。羽釜はそれに応えるように、一度纏めた羽を広げて、もう一度はざりと羽ばたいて見せた。

「せつかくだし、食べようよ。はいちゃんも、一緒に」

俺はまだ熱い羽釜を毛布に包んで立ち上がると、クッションごとと仏壇へ連れていった。居間のちゃび台も仏壇の前に運び込んで、はあちゃんと俺とはいちゃん、三人分のパエリアを皿に盛る。蛤たっぷりの皿は、はいちゃんの仏壇へ供えた。

はあちゃんの味噌汁と漬け物と、蛤のパエリア。カラフルに彩られた仏壇を囲んで食べた夕飯は、おかしな取り合わせなのに、なぜかびつたりとほまつていった。

それから月に一度、羽釜はいろいろな国の米料理を届けてくれている。

はいちゃんとはあちゃんの机上旅行はちゃび台旅行へと進化して、いまや仏壇は、世界一周も遠くない。